令和７年度長崎原爆資料館運営審議会小委員会 第１回議事録

【日時】　令和７年10月23日（木曜日）　11時00分～13時00分
【場所】　長崎原爆資料館２階 会議室
【議題】　１ 協議事項
　　(1) Ｃコーナー「二つの世界大戦」の展示
【審議結果】
１　協議事項
（１）Ｃコーナー「二つの世界大戦」の展示

・事務局より説明
・委員意見事前共有

事務局
説明は以上となりますが、本日参加予定委員が開始時刻に間に合わないということでしたので、事前にコメントをいただいておりますので、ちょっとここで事務局から共有させていただきます。いただいてある、修正の提案なんですけれども、まず１ページの3-1-1「世界戦争への道」の５行目に、「オーストリア皇太子の暗殺事件をきっかけに」と書いたんですけど、これは「オーストリア皇太子」ではなく「オーストリア皇位継承者」ということで、そこ修正してほしいってことでいただいております。あと、６行目に「世界大戦には日本も権益拡大のため参戦」というふうに今書いてあるんですけれども、下のトピックと参戦理由の説明を合わせるためにも「日英同盟を名目として、権益拡大のため参戦」というふうにしたほうがいいのではないかというふうにいただいております。あと、「第一次世界大戦と日本」というトピックのところで、「満州」っていう漢字の「州」がさんずいを入れない方を書いてたんですけども、歴史用語としての中国側の一般的表記として満州の州はさんずいの「洲」があるほうがいいんじゃないのかといただいております。あと、「第一次世界大戦と日本」のところで、「ドイツが影響力を持つ南洋群島と山東半島」という風に書いているんですけど、ここも「ドイツ領の南洋群島とその租借地の山東半島」としたほうがいいのではないかというふうにいただいております。次に３ページ3-2「第二次世界大戦－戦争へ向かう日本と国際社会」ってことで、全体的な説明として「国際連盟」を「国連」とちょっと短くまとめているんですけど、ここは正式名称の「国際連盟」として書いたほうがいいのではないかってことでご意見いただきました。あと４ページの小項目3-2-3「第二次世界大戦とアジア･太平洋戦争の勃発」のところなんですけれども、アジア・太平洋戦争は一般的には第二次世界大戦の一部に含まれるということで、「と」で二つ並列することで表記上、やや違和感が残るっていうことで「第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発」って言ってたところを、「第二次世界大戦とアジア・太平洋への戦線拡大」にしたほうがいいのではないかってことで修正の提案をいただきましたので共有させていただきます。
事務局の説明は以上となります。

・質疑内容

副会長

はい、どうもありがとうございました。時間の関係でテキスト全部を読むことはできませんでしたけれども、3-1 から 3-3 まで流れがわかるように説明いただきました。それでは、各委員からこの展示内容の内容について、ご議論いただきたいと思います。よろしいでしょうか。

委員

それでは委員からのご意見いちいちごもっともなところで、後で私も追加説明しますけれども、私、気がつかず、そのままスルーしてしまっており申し訳ないと思うところもありました。まず全体のつながり方ですけど、小項目のつながりかたですけど、上手くいっているかなと思います。少しこう、小項目の本文の中で説明足らずのところはトピックでもう少し詳しく説明するということで、説明を加えていくので、それもうまくマッチしていっているかなというふうに思います。なかなかあの、博物館の展示、長いと読んでくれない、でも短いとなかなか中身がきちっと盛り込めないというところで苦労するところで、これ以降も多分いろいろ文章を触らないといけないとこあると思いますけども、大まかなところでご意見を申し上げたいと思います。

3-1-1 のところは、委員のおっしゃる通り、昔は皇太子で教えていましたけども、オーストリアにはそういう制度はないので、今は高校の世界史教科書も「皇位継承者」という当時のオーストリアの制度で説明をするようにしています。世界戦争への流れもこの文章でいいかというふうに思います。

それから満州ですけれども、「満州」という地域名を取り上げて言うのは、戦前の日本であって、もともとは「マンジュ族」というところから「満州族」という、まあ「ジュシェン（女真／女直）族」のことを、「ジュルチン」のことをそういう風にも言うわけですけれども、それが住んでいたところというので、日本は満州という言葉はそこから、それから、内モンゴルとの関係で、「満蒙」という言葉も、二字熟語も戦前の新聞によく出てくるのですが、これも日本で作った言葉で、中国語はそういう位置づけはしていない。「満蒙」を一つの権益の広がる地域というふうに考えるというのが、日露戦争後の日本とロシアの協約を通じての共通認識ですので、そういう「満蒙」という言葉も日本は作るわけですけれども、そういう意味で、「州」というのは、さんずいがつく方が本来使っていた言葉で、戦後、このさんずいがつかない方は「通州」とか「広州」とか、そういう町の名前ではそういう風に使うんですけれども、地域として、広い地域を表す言葉ではさんずいがつくのが普通なんですけど、長い間常用漢字に入っていなかったので日本の教科書はずっとさんずいを使わないで表記していました。でも常用漢字に入ったというのと、それから世界史の高校の教科書は昔から、私が今言ったような意味でさんずいをつけるべきだというのがあり、さんずいをつけるのが多くなっています。「歴史総合」というのが新しく科目で作られて、教科書も新しく作られたのですが、その半分くらいはさんずいの方の「満洲」で表記をしていますので、今後入試でも両論二つ表記することになると思うけども、共通テストでも、さんずいを付けるのでそのほうがいいと思います。

ただ、2 行目の「満州に権益を持つ」というここのところと、それから今さっき委員ので「租借地の山東半島」というのがあったけど、満州の全域が日本の権益の及ぶところではなく、南満州だけなんですよ。北満州は依然としてロシアなので。東清鉄道もハルピンより、えっと東清より北はハルピンも含めてロシアが持ったままなので、それはソ連時代にもずっと続いて、満州国に最終的には、1930 年代に満州国建国だから、1934 年だったかな、に譲り渡すというところまでソ連は持ち続けているので、北満州には日本は勢力を及んでいないので、この段階で勢力を持っているのは満州の一部、遼東半島と言われる、

日本は「関東州」という名前を付けますけれども、この関東州はさんずいを付けない「州」ですけれども、なのでここでは「満洲の一部に権益を持つ」としたほうが、「一部」というのを入れたほうが正確かなと思います。

「ドイツ領の南洋群島とその租借地の山東半島」、ちょっと委員の意見書を事前にちらっと見ただけなんで、メールで見ただけなので、正確ではないかも分かりませんけれども「ドイツ領の南洋群島と山東半島」のドイツが租借しているのは山東半島全部ではないので、青島、膠州湾、青島を中心とする膠州湾を租借地としているので、ドイツの山東半島、青島租借地のほうがいいかな、を占領しという、そこのところ表現をあの、工夫したいと思いますけれども。

それと、このトピックの最後の行の「日本の権益の確保と拡大を求める」というので、正確な事実なんですけれども、何のことかわからない。どうやって調べ、すべてを説明しないにしても、何かキーワードを示しといて、あとで観覧者が調べることができるようにするということからすると、この中国に対する日本の権益と拡大というので「対華 21 カ条要求」というキーワードを入れたほうが「対華 21 カ条要求」の中身を書かなくても、そこから出発して調べるという意味で、今の書き方よりも先へ進めるヒントになっていいのではないかと思って、それを入れたほうがいいかなと思います。

3-1-2 の「総力戦と新兵器の出現」は別に意見はございません。

2 ページ、3-1-3 の第一次世界大戦によって世界は戦争のない世界に向けて動き始めた。そのことによって国際連盟が創設されたということなんですけれども、これも、たしかにこれで間違っているわけではありませんけれども、これまで世界は平和を作るための会議というのを 2 回、オランダのハーグでやっているんですね。「ハーグ万国平和会議」という名前で当時訳されていますけれども、そこで例えば 1907 年には戦争する前には宣戦布告ないしはそれに類するような行為が必要であるという条約を結ぶとか、開戦に関する条約ですね。それとか、ダムダム弾など不必要に被害を与えるような銃弾は使ってはいけないとか、そういうことを 2 回やっているんですけれども、国際赤十字の主催による臨時の会議だったと。それが 1920 年に、常設の国家間が協力をいつでもジュネーブで話し合うことができる国際連盟になったという意味で、「常設」という言葉、「常設の国際機関として初めて作られた」という、そういうような意味が入ったほうがいいのではと思いました。しかし、そういうヨーロッパ大国を中心とした国際協調に対しては、民族独立の運動が高まっていったというトピックは確かにそうだと思います。それから、戦闘行為というので、化学兵器や生物兵器だけじゃなくて、もっと広く戦闘行為そのものを規制するという、そういう動きもひとつひとつ、戦争の違法化に向かって積み上げていくことになるわけですから、そういう意味で表題が変わるというのも賛成です。

そして、「国際連盟」という名前を使うべきだという。戦前は、日本の新聞を見ていると、「連盟」という言葉で省略していて、確かに国連というのはやっぱり戦後の使い方だというふうに思いますので。国際連盟という、連盟では分からないので、「「国際連盟」という四字熟語をそのまま使わないと仕方がないかなというふうに思います。それが、1-4 のとこらへんですね。3-2「満州事変から日中戦争への拡大」も、日中戦争への拡大と長期化というのも、特に小項目の、小項目はあるのか。ひとつ教科書的なところとの兼ね合いでいくと、2 行目 3-2-2 の「日中戦争の拡大と長期化」、2 行目の「北京郊外」の「北京」は、当時は「ペーピン」という「北」の「平」という字を書きますけれども。という名前で、「南京」と対立しない地名に中国は変えていたので「北平」という、北の平と書く。それを先に出して、かっこで「北京」というほうが良いかなと思います。

「南京事件」も、「南京事件」という表現でもいいと思いますし、そこで捕虜とか民間人が殺されたという事件があったということは、前にも申し上げたように、安倍晋三首相の相談相手であった北岡伸一東大教授を中心とする代表が、中国の社会科学院の歩平さんたちとやった日中共同の、あの近代史の突き合わせというのがあるんですが、そこでも表現されていることでありますので、この表現で私はいいというふうに思います。

3-2-3 ですけれども、委員の言われることは確かにそうで、1941 年 12 月 8 日の日本の開戦というのは、当時の言葉でいえば「大東亜戦争」で、学術的にいえば「アジア・太平洋戦争」という言葉になるわけで、私は、あの学術用語というものは歴史表現では優先されるべきだと思っていますので、表現はこれでいいんですけれども、「アジア・太平洋戦線への戦争拡大」という、そういう風にしたほうがいい、この「と」と結びつくのは違和感があるという委員のご意見なんですけれども、ただそうすると、12 月 8 日の朝のラジオ発表、大本営発表で戦争が始まったというふうに国民がこう思って、まあある意味で言うと、中国と戦争しているのは後ろめたかったけども、アメリカの人と戦うとなると何かあの気分が明るくなったという、そういう表現している作家とか、そういう日記がいっぱい残っているんですけれども。そういう意味での 12 月 8 日の開戦の重みというか、そういうのがまあ消えてしまう表題になるので。そうすると、このままでもいいのかなと「アジア・太平洋戦争の勃発」というのでもいいのかなという風に思います。ただ、その第二次大戦に、米英が参加することになったんだという意味では、この小項目の最後の行に「全世界へ拡大しました」ということで、表現されているんだけども、それまで第二次大戦に参加していなかった日本とアメリカが、これによって参加することになったという意味ではそのことを「日米が第二次大戦に参加し、世界戦争となった」というような表現にした方がいいかなと思います。

3-2-4 は、まあこれで、いいかなと。ソ連の問題が出てくるんですけれども、ソ連とは中立条約を結んでいるのでお互いに戦争ができない状況になっているんですけど、5 ページの 1 行目のポツダム宣言を発表のところの「連合国」は、「米・英・仏・中の名前で」とか、なんかポツダム宣言を出した 4 か国を出したほうが、ソ連が入っていないというのがそこから読み取れる訳だし、「ソ連の和平斡旋に期待する日本はこれを受諾しませんでした」という最後の行もそれで生きるんちゃうかなというふうに思います。あの、連合国というのが何を示しているのか、というのは別にきちっとした認識を持っているわけではなく、最後の段階でソ連が対日宣戦し連合国に入ってしまっているから、だから、そこを誤解というか、読み取らないようした方がいいかなという風に思います。

核時代のところもないんですけれども、3-3-2 の「原爆の使用決定」のところです。5 ページはいいとして、6 ページのところでいくつかの選択肢があって、「原爆の使用を警告して天皇制存続を保証すること」、天皇制存続を保証することを、明記するべきだというアメリカの国務長官の意見もあったんですけれども、入れないというのが大統領たちの考えで、それが日本がポツダム宣言の受諾を 2 回にわたって、8 月 10 日と 8 月 14 日と、2 回にわたって伝えなければいけないことになるんですけれども、そのことが柔らかく書いてあって、この 4 行目ですけれども「26 日に発表されたポツダム宣言では日本の降伏にあたり重要な言葉は明記されませんでした」という、重要な言葉で原爆の使用とたぶん国体存続という、天皇制存続という、この 2 つのことを言ってる、指しているんでしょうけれども、たぶん初めて見たらなんのことを言っているのかわからないような気がするので、原爆の使用や、ようするに日本が、まあ天皇制存続だけに絞ってもいいと思うけれども、「天皇制存続の保証などの言葉は明記されませんでしたが」、そこまではっきり書くとあれだから、ちょっとここは練っていただいたほうがいいかなと思います。

それから最後、7 ページです。「広島・長崎への原爆の投下」という最も重要なところですけども、経過はこの通りだと思います。立命館大学国際平和ミュージアムは京都が途中まで目標に入っていたということが大事なので、そういうことが途中まであるんですけれども、長崎の資料館ですから最後の段階の 8 月 2 日の目標決定でいいと思いますけれども、それで、第二次大戦は終結したと。終結して、戦後どう向かうのかというと、戦後やっぱり第一次世界大戦後と同じように世界は平和に向かったわけで。平和のために、前、委員もおっしゃってましたけれども、軍縮であるとか、原爆の使用の問題であるとか、そういうことが問題になっているので、そうすると、戦後の植民地が独立したというのと、核の時代がうまくマッチしていないように思いますので、戦後、世界は再び国際平和を目指して「国際連合」を作ることになったけれども、大国による「核の時代が新たに幕を開け」、そのことと冷戦というのは、まあつながっているけれども、こういうつながりでいいのかなという表現の問題はあると思うということです。

そして、トピックで、これが最後です。原爆裁判で、東京地裁の判決、ICJ の「一般的に違反する」との判断を示したことで、2021 年の核兵器禁止条約の発効へとつながっていったという話なんですが、これは確かに間違っていないんだけど、そういう動きがあったから 2017 年に採択されたと。採択されてそれに応じて、50 か国かな、が批准したので 2021 年に発効したということなんで。何年かかったのかなという気がしますし、4 年しか違わないという場合 4 年しか違わないので、流れから言うと、世界がそれを認めたのはいつかということになると、採択の時点だと思うので、2017 年採択の方にしたほうがいいのではないかと思いました。

ざっと以上です。また議論の中で出てきましたら、応答したいと思います。すみません。

副会長

どうもありがとうございました。

委員の説明について何かご意見等ご質問ありますでしょうか。はい、どうぞ。

委員

ありがとうございます。

全般のコメントはあとで言うとして、委員のコメントの中で、3-3-2 ポツダム宣言のところなんですけれども、私もこの「重要な言葉」というのが上と離れているのでちょっとどうかと思いつつ。最後の文で「そのため」っていう風にここで因果関係を出しているのが若干違和感があって、おそらくこれも一つの要因だと思うんですけど、それだけではないので、そうであればそれを明確にするために、最後の文を第一文のあとに持ってきて、「選択肢があったけども、そのような重要な言葉は明記されませんでした」と、「そのような」という言い方をするかどうかは工夫するとして、もっと天皇制存続の話と「その言葉は明記されなかった」というところを直結するような形にして、そのうえで、その背景には「ソ連の参戦前に云々」と示そうとしたということもあったといわれているみたいな、なんかそういう風にしたほうが、全体の因果関係の整理と文言をより明確にすることになるのかなと思いました。

副会長

その点について、お願いします。

委員

はい、同意します。確かにつながると思います。

副会長

この点についてよろしいですか。

どうしますか、これは事務局で検討してもらって、再度提示していただくということでいいですか。

事務局

はい。

副会長

そのほか、お願いします。

委員

私からは、1 か所だけです。3-2-3 のですね、「第二次世界大戦」の次のとこの問題なんですけれど、「アジア・太平洋戦線」っていう言葉が使われると、少しこれまで確立してきたイメージがちょっと縮小されたような印象を受けます。それで、「と」があまり良くなければ「および」か何かに変えるとかですね、やっぱり「アジア・太平洋戦争」というのが、戦争の上に戦争が重なったっていうことの事実としてそうなので、「太平洋戦争の勃発」というのは使った方がいいんじゃないかと思います。以上です。

委員

いや、私もその意見です。だから、委員とちょっと議論しないと次回にでもまた、もし後半で参加されたらやりますけど。

事務局

最後の 30 分に参加されます。

委員

じゃあそのときによろしくお願いします。

副会長

ほかにありますか。

委員

すみません、もう一つ追加なんですが、3-3-1 の「原爆の開発と実用化」のことで、最初に申し上げたいのは、日本でも原爆開発の計画が陸軍と海軍であったというのはよく知られていることなので、それをまったく触れないというのは、まああまりにも小さい計画だったので触れる価値もないという判断があっていいとは思いますが。

それからアインシュタインさんの果たした役割というのが、アインシュタインの書簡ということで、写真が出てですね、教科書的には、行われてきたんですけど、ここでは関連資料においても採用されていないし、最後の 3-3-3 で「原爆投下に反対する人々」というところで、シラードさんとアインシュタインの写真が出るんですが、彼らが果たした役割は、やっぱりあのルーズベルト大統領への書簡が最初に歴史的には大きな意味を持ったんじゃないかと思いますけれども、そこをちょっと、整合性を取る必要があるのかなと。まあアインシュタインの書簡をちょっともう 1 回取り上げていただきたい。それから日本にも核製造の計画が陸軍、海軍にあったということは触れたほうがいいんじゃないかなと思います。

以上です。

副会長

はい、ありがとうございました。事務局への質問ですけど、関連資料についてどのように進めるのかというか。今おっしゃったような新たな提案というか。

事務局

はい、今日頂いた部分を参考にさせていただきますし、ある程度、小項目の内容が固まった段階で、今

後どういった写真を使うのかとかいうのは検討していきたいと思いますので、今のご意見も参考にさせていただきたいと思います。

副会長

はい。どうぞ。

委員

委員のお話に関連してということではなく、全般的な話ということで今はよろしかったでしょうか。

今回資料を拝見して、そもそも非常に限られたスペースの中で、これだけの内容をある種、取捨選択しながら文章化した学芸員の方々の努力がまず滲み出るようなものであると思いますし、またそれ自体にいろいろな限界もあるということがわかるわけですが。その上で、今、皆様かなり中身の話に、文言も含めて入っていったところなんですが、ちょっと一回、私のほうからは少し違う観点で、考えたことを皆さまと少しご意見を頂きたいと思います。

まず、今回のそもそもの展示更新そのものの目的がですね、やはり今現状のＣコーナー全体の、ここだけではなく、そのあとの現在に至る核兵器開発や軍拡、あるいは軍縮に向けた歴史も含め、やはりとりわけその資料館に来る小中学生、修学旅行生も含めて、さっと通り過ぎてしまう、なかなか文脈として理解することが難しいという問題も含め、どうわかりやすいものにしていくのかっていう、しっかりそこでの資料館として伝えたいメッセージを受け取ってもらうということは、やはりあのゴールであって、そこから逆算して、そこまでそういう意味での正確性とか、中身の、先ほど委員がおっしゃられた「先に進めるヒント」というのはひとつ大事な話で、つまりここで限定的な情報しか出していないんですっていうことを大前提とした上で、ひとつは工夫として例えば、言葉として分かりませんけれどもキーワードっていう形で提示して「調べてみよう」みたいにしたり、あるいは「この点はどうなのかな」とかですね、つまり書ききれないことで、しかし重要な点があるみたいなことは上手くその次の学びにつながるような工夫があればいいんじゃないかなというふうに思っているところです。

それも踏まえて、話が長くなるんですけれども、全体的なまず 300 文字に小中学生に読んでもらえるように設定したというところから話が始まっていて、ものすごくお気持ちはわかるというかですね、そのあたり副会長のご意見も伺いたいのですが、おそらく小項目、英語も併せて展示される前提だと理解しています。その時にあの、トピックというところも同じく英訳があるのかは分からないですが、すみません別に攻めてるわけではなく、恐らく相当文字量の多い印象の展示になってくだろうという気はするんですね。その際、先ほど、副会長から関連資料をどうしていくのかの手順というのもあったんですけど、そこにどれほどのつまり、これは実は以前、学芸員さんに教えていただいたんですけど、展示のセオリーでいうと文字が 2 割、資料 7〜8 割とか、文字 3 割資料 7 割といったものが、考えていったときに、このトピックも含めて文字情報となったときに、そもそもこれが受け手に、とりわけ若い世代の人たちがどう受け止めるのか。つまり我々は教科書を作っているのではなく、展示を作ってるんだというところですね。私が言うのも本当におこがましい話なんですが、どうしても専門的な話になっていくとあれもこれも盛り込もうというところになるので、そこはあのもう少し意識をしたほうがいいのかなと正直思ったところです。その時に、いみじくも最初に事務局の方が、今日議論してもらうのは 3-1、3-2、3-3 のコーナーである、なぜかというとそれはこの長崎の「二度と核兵器を使わせない」そして「核兵器廃絶」というものを実現する、長崎を最後の被爆地にするためには、どのように戦争に突入した、そしてなぜ戦争を日本は止めることができなかったのか、そしてそこによって、つまり人間にフォーカスをして、人々

にどのような苦しみの結果を与えたのかというような大きな、つまり、なぜここを見せたいのかっていうところが、やっぱりストレートに、来た方に、教科書的な内容に入る前に伝わるということがひとつ必要、なぜあなたはここを勉強するんですよという理由付けですね。私、教科書とかいろいろ、小中学生の教科書を見ると、やっぱり一番最初に「あなたがここで学ぶことは何か」みたいなことが書かれていると、自分が、なんていうんですか、目的意識を持ってこれを勉強しよう、もっと詳しく知りたい人は先につなげる道筋がある、みたいな形で情報を限定していくと。かつ、最初から苦手意識がですね、どこまで読み仮名をふるとか、例えば「総力戦」という言葉であったり「塹壕」だったり「膠着」だったり、そういったものだけで、多分意識が離れてしまうのは割と想像がつくんです。なので、教科書であれば座って、最近の子どもたちであれば AI 使ったりなんだりと検索しながらもってくものを、あくまで立って、人が大勢いるところで、斜め読みに近い形で読んでいくときに、それでも持って帰ってもらいたいメッセージはある程度伝わるんだっていうところで、もう少し、例えば小項目の言葉を一段階かみ砕けないかとか、あるいは副題のようにですね、タイトルはこれでいいとして、それはなになになんだ、これにもう一段階かみ砕いた副題があるとか、そういった工夫は必要じゃないかなというふうに思います。

ごめんなさい、さっき言い忘れたのですが、目的意識のところに、やっぱりこれはこう基本方針にあった、歴史をみつめることが未来につながるんだっていうことを最初にストレートにですね、このコーナーはそのために皆さんにわかってほしいんですということを言っているみたいなことができないのかというふうに思っているところです。それから、年表的なものは元々あったものは使わないということで、説明の通り理解はするんですが、とはいえ、やっぱりこの時系列で話が進んでいる部分っていうのは、ある程度可視化されたですね、時代がこう動いていたんだよと言うことが何かやっぱりあの、見てわかるということが、文字情報の限界というのもあるので、必要かなというふうに感じています。なによりも、こうした教科書的な、教科書的なという言い方をしてほんとごめんなさい、私非難してるわけじゃないんです。ただ、やっぱり教科書的な文言は冷たいんですよね。冷たいと私は感じます。歴史的事実であるとしても、やっぱり資料館の目的からしては、人間の顔の見えるようなまさにあの前半の A コーナー・B コーナーというのはそうだと思うんですね。原爆の被害というのは、熱線、爆風、放射線というような科学的なものが示したものであっても、そこにいったい人間に何をもたらしたのかというのが強く書かれている。だから人の心を打つし、勉強にもなるということだと思うんです。同じように、このコーナーも歴史を学ぶんだけれども、そこには人間がいるんだみたいなところをもっと強調できるようなところができるといいなと。

すいません長くなりましたが、まったくその先生方の専門的な話とは違う角度で、やっぱり本当にここがとてもとても大事なところなので、伝わってほしい、そして、次なる学びにつなげてほしいという思いから発言させていただきました。

以上です。

副会長

ありがとうございました。いろいろなポイントをお示していただきましたけれども、今の中身について事務局として何かお答えできることありますか。

事務局

はい。まず今回の 300 文字の字数について、確かに 300 文字っていうのは多いんだろうなと考えております。この部分はですね、先ほどお話のあった写真であったり、映像であったりとの組み合わせ、どう

いった配置の工夫で、どこまで低減できるか、今後、乃村工藝社さんと詰めていきたいというふうに考えております。

それから流れが一瞬でわかるようなキーワードであったり、サブタイトルですね。こういったところで、全部の文字を読めなくても、そういったところで感じ取ってもらうアイデアっていうのは検討する余地がある、検討できるのではないかと考えています。

それから、最初に言われたまず一番最初の理由付けの部分ですね。なぜこれを学ぶのかといったところは、一つのメッセージをどこかに掲示できるような工夫というのは今後検討していきたいというふうに考えております。いずれにしましてもなかなか難しい内容になりますので、そういったところをちょっとでも、いろいろな工夫で低減できるような取り組みをしていきたいというふうに考えます。

以上でございます。

副会長

はい、ありがとうございます。追加資料のこの写真を見ると、これで大体 200 字ぐらいなんですけども、この「日中戦争と太平洋戦争」の文字があって、その下に英文もある。何語か数えてませんけど、200 文字でもこの分量で、300 字で今進めているわけですけど、これあれですかね、実施設計上この文言というのは今日ご意見いただいて、委員からの専門用語とか、あるいは若干の言葉をもう少し柔らかくするとかありますけども、300 字というハードルは厳守ですか。

事務局

短く書けるところはまあ 250 とかそのくらいで書くんですけど、上限を 300 文字として、これ以上はいかないっていうふうに。上限 300 で、それ以内に収まるようにほかのところは短くまとめるっていうことで、今後進めていきたいと思っています。

副会長

それはよろしいですか。そういうことで。委員いかがでしょう。

委員

たしかに原稿のこの柱の説明はもう少し短いような気がしますけれども、でもひとつの小項目の表現としては、300 超えたらいけないというふうに思いますけれども、実際にこれ展示したときに何行になるのかというのがあるかもわかりませんが、まあ 300 字目安というのは、それでいくしかないかなと思っています。

副会長

逆に小項目 3-1-1 から 4 まであるんですけれども、いま委員おっしゃった、このコーナーでは何を学ぶのかというような大きな学びのゴールですが、それは 3-1 でひとつ、3-2 でひとつ、3-3 でひとつなのか、あるいは、C コーナー「二つの世界大戦」全体での投げかけになるんですか、どちらでしょう。

委員

私としては全体でいいかなと思うんですね。「二つの世界大戦」のセクションに、その前のところからやっぱり場面展開がかなり大きいわけですよね。なので、これまで、今回は、ある種すごく難しいハードルが高いことをやろうとしていることの一つが、A コーナー・B コーナーは、ほぼ触らずという感じできますので、そこで見ているものと、ここに来るとやっぱりちょっとガラッとテーマが変わるので、そこに入ったところの、動線でいったところの意識付けみたいなところが、まず 2 つの大戦という風に、いま「日中戦争と太平洋戦争」みたいな形のそういうパネルになるのか分かりませんが、とにかくそこの前

のところの展示から、どういう意識でそこに動くのかというところを、埋めるものが何かあればいいんじゃないかなという意識で申し上げました。なので文字数を減らすという意味では、それぞれのところに何か書くという必要はないかなというふうに思っております。

副会長

はい、ありがとうございます。ということは、B コーナーの「原爆による被害の実相」とかC コーナーの「核兵器の脅威」とかっていうような、前回頂いた表なんかからいくと、それぞれのコーナーにそういった、投げかけというか、ここで学んでほしいというメッセージを入れるということでよろしいですか。

委員

そうですね。それでいいと思います。

委員

私も全体のコメントの中で似たような話をしようと思っていたので。若干話が進んでいるので、ここで説明させていただければと思うんですけど。ちょっと全体の話をした上で、いろいろコメントさせていただきたいと思います。

全体としては加害と被害の要因をきちんと説明するという基本方針に沿っていると思いますし、同時に世界的な平和思想の動きがあったこと、それから裏腹に無差別攻撃といった動きがあって、それがその原爆投下といったことにもつながっているというようなことが分かる内容にもなっていますし、他方で、加害を描くことで原爆投下を正当化しないという工夫も原爆をめぐる裁判というところでしている、ちょっとこの辺あとで細かくコメントがあるんですけれども、なっていると思います。ただ、今までも何度も私、ちょっと申し上げたことがあったのが、時系列にフラットにやっていると、なかなか何が論点なのかがいまいち分かりにくいというか、どうしてもまさに委員がおっしゃったような教科書的になってしまうというのがあって、特にあの核の脅威のところだと、まあ来週の話ですけども、第一の核の時代、第二の核の時代と、こうぱっぱっとなってるんですけれども、それも、なぜ核兵器がどうしてもなくならないのかっていう問題設定をした上で、それを説明するような展示にしたほうが、まさに小中学生はわかりやすいのかなと私は思っていたんですよ。

どうしてもこの中間報告が、これがこういう形になってしまっていたので、私もこれで進めるしかないのかなと思っていたんですけど、まさに委員がおっしゃったことはそれと関連していて、理由付けを冒頭に置くというのは非常にいいと思うんですけども、むしろ本当はこの全体自体がそういう風になったほうが良くて、なぜ原爆に至る世界戦争はどういうふうに始まったのだろうか、みたいな問題設定をまずして、それで説明すると。その上でじゃあ日本はいったい何をしたのかと。日本にはどのような責任があるのか、というタイトル。それはどういう言葉にするのかは別にしても、そのうえで、例えば、誰もとめようとしなかったのか、一体何が起きたのか、最後にそれでは原爆投下は正当化されるのか、というようなタイトルにして、というのは平和思想とか戦闘行為の規制とかそういうところがありますけども、3-1-4 ですね。これ時系列にすると非常に、前に来ていて、原爆投下が最後の方にきて、一番最後にもう一回「原爆投下をめぐる裁判」のところ、その戦闘行為のところで一度言及はしているんですけど、どうしてもここが離れてしまっているので、こうリンク付けすればいいというコメントをしようと思っていたんですけども、こういう時系列だとどうしても離れちゃうんですよ。なので、問題設定をしたうえでその問いに対する答え、答えというか我々資料館としての見方とかなのかもしれませんが、そういう形の展示とすることでよりわかりやすくなるんじゃないかなと。

来週の例えば核のところは、なぜじゃあ核兵器はなくならないのかっていうことを国際政治や安全保障の観点から説明して、それをじゃあ乗り越えるにはどうすればいいのかっていう問いを立てて、こうこうと。そのうえで、次の長崎の平和運動につなげていくという展示にしたら、展示自体が問いと答え、問いと答えという形になって、時系列ではなくて、教科書的ではなくて、そうするともうちょっとダイナミックな展示になるのかなと前から思ってはいたんですけど、そういうふうな話もちょっと何回か発言をさせていただいたんですけども。もしどうしても時系列にするということであれば、いくつかリンク付けがなるような形でできればなと思ってまして、その前提でちょっと細かくいくつかコメントさせていただくと、例えば 3-1-4。これは非常に重要な部分なので、要は「原爆投下は認められない」ということにつながる重要な展示だと思いますので、これを核兵器にもつながるっていうことを、関係するということを書かないと、ここに書いてある点だけだと、やっぱり生物兵器、化学兵器とあと戦争を違法化されたことだけですので、例えば戦争そのものが違法化されたけれども、それでも戦争が起きた際には非人道的な行為は認められないっていうことが、ただ時系列にどうしてもしてしまうと、戦争の違法化はあとにきているんですよね。その戦闘行為の規制が先に来ているので。そうすると、ナラティブとしてはすごいやりにくいので。本当はナラティブとしては、戦争そのものは違法化されたけれども、それでも戦争が起きた際には非人道的な不必要な苦痛を与えるような行為はしてはならないと。要は、軍事目標主義、軍事と民生は区別しなさいといった、不必要な苦痛を与えてはならないといった原則、といったのが国際慣習法としてあったんだということをここでもうちょっと明確にした上で、原爆投下のところともっと密接に絡めないといけないですよ、どうしてもはなれてしまうので。この 3-1-4 を、もうちょっと核兵器にも関連するような書き方にした上で、最後の原爆投下をめぐる裁判っていうところは、これだと、ちょっと弱いと思うので、裁判というと国内の裁判かっていう風になっちゃいますので。もちろん ICJ もありますけど、ICJ はその原爆投下を巡る裁判ではなくて、核兵器使用の一般的な話ですので。本当はだから、ここを例えば「広島・長崎への原爆投下は国際法違反なのかどうか」という問いみたいなトピックにして、さっきの 3-1-4 と統合する形で説明すれば、よりわかりやすくなると思うんですけど。どうしても時系列になっているんで、ちょっとそっちに物事があってこっちに離れている。もしそうだったらリンクさせたうえで、3-1-4 で説明した通り、一回リンクさせて広島・長崎への原爆投下というのは人口密集地への原爆使用であると。それはだから普通に考えれば軍事目標主義という国際慣習法に違反しているのではないかということを書いたほうがよりわかりやすくなるのかなという風に思います。ですので、できれば、この時系列の教科書的な展示ではなくて問題設定のナラティブな形にするか、そっちのほうがいいと思うんですけど、それが難しいのであれば、この中でであってももう少し、よりリンクして、明確になるような形にしたらいいかなと思います。

副会長

委員の問題提起というか提案は、私の理解ではそれほどダイナミックに変更しないでも追加というか。今、委員がおっしゃったように、各コーナーで大きなメッセージ的な何を学んで欲しいのかといった、なんていうのでしょうか、副題というか、優しい導入を。それから、基本的には時系列になっているけれども、3-1、3-2、3-3 の個別の中項目に副題を、委員のような問いかけというか、問題提起というのか「なぜ戦争が終わらないのか」とかそういうような、ハイブリッド型いうか、ミックス型というか、そういうことは可能ではないかという印象を持ったんですけど、事務局はどう聞きましたでしょうか。

事務局

委員から大きいコーナーでの問いかけ、委員からはそれぞれ小項目での問いかけというご提案をいただいております。ちょっとここで可能ですと回答をするのはちょっと難しいんですけれども。それは先ほど言いました文字数の関係であったりとか、配置の関係であったりとかにも影響してくると思いますので、そのあたりはもう一度事務局のほうで乃村工藝社と一緒に整理をさせていただいて、対応を検討したいと考えております。

副会長

委員よろしいですか。

委員

はい。特に、3-1-4 と、3-3-4 とその後にあるトピック。これは明確にリンクできるような形にするのか、時系列だとどうしても 3-1-4 に来てしまうので、ちょっとそこを何とか工夫すれば。

事務局

トピックと 3-1-4 を書く時に、リンクさせるような形で書いていたので、そこの相互関係は分かるようにちょっと工夫したいと思います。ありがとうございます。

［委員オンライン参加］

副会長

はい。画像と音声が入りました。委員今までの経緯をお聞きになっていないと思いますけれども、いただいたコメントは全員で共有しました。時間も迫っておりますので、まず大きなコメントをいただければと思います。よろしいですか。

委員

どうもありがとうございます。まず、遅れての出席となりまして大変恐縮でございます。

すでにいろいろな議論をされたと思いますので、簡潔に私のコメントを申し上げたいと思います。まず、細かい点については、資料をお送りした点についてお手元で共有をいただいているかもしれませんが、まず大きな流れとして個人的には大変よくできた文章ではないかと思います。非常に難しい、近現代史でも最も難しいテーマを扱っていますので、もっと論争的なテーマを扱っていますので、そういった意味ではどのような書きぶりでもいろんな批判、指摘というのが出てくると思いますが、いろいろな視座というものを統合してうまくおまとめになられたという印象がございます。

私が指摘したものは、例えばオーストリアの皇太子、これは直接の子供ではないので、皇位継承者と一般的には書くことが多いので、そういったかなり細かい点でございますので、そちらは適宜ご覧いただければと思います。それ以外のところにつきましては、わたくし個人として強い違和感があることはございませんでした。事前にいただいた校正の原稿についても、基本的には良い形で変更していただいているのではないかと思います。

一点だけですね、大きな点で申し上げると、小項目の変更で 3-2-3「第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発」ということです。通常、アジア・太平洋戦争というものが第二次世界大戦の中、欧州戦争というときにはアジア・太平洋戦争になるんですけど、第二次世界大戦の中にアジア・太平洋戦争は含まれると思いますので、「と」でわけてしまうとちょっとわかりにくい気がしております。

他には特にございませんので、わたくしとしては、基本的に、ご提案頂いたものと、細かい修正のみで、以上でございます。

副会長

ありがとうございました。委員から頂いたコメントに移ってよろしいでしょうか。

3-2-3 のタイトルが、委員と若干意見を異にしていますので、少しここの点について、委員から説明お願いします。

委員

委員、お忙しい中コメントを書いていただきありがとうございました。私もすべて同意で、私が気づかなかったこと、ありがとうございました。ただ一点だけ違う意見がありまして、今最後におっしゃったところなんですけど、1941 年 12 月 8 日がアジア・太平洋への戦線拡大というのと、それから日米が第二次大戦に参加したというのは事実なので、内容としては理解できるんですけれども、ただ 12 月 8 日はやっぱり日本の国民やアジアの人々にとっては、アジア・太平洋戦争が始まったというのがあるので、そうすると戦線拡大ではやっぱり弱いかなという気がするので、このまま「第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発」でいけないかなというのを、まだ意見として持っております。いかがでしょうか。

委員

結構だと思います。私が申し上げたのは、通常そのやはり日本とアメリカが参戦したことによって、逆に第二次世界大戦という、それまではヨーロッパの戦争が世界全体に広がって、第二次世界大戦になったというような理解もあります。いろんな、先生ご存知のように理解が可能だと思いますので、第二次世界大戦とアジア・太平洋戦争の勃発ということで、これ二つがどういう関係なのかということは、ふたつ並べたところでとくに齟齬があるということでもないような気がしますので、おそらくパネルの説明の中で「戦線が拡大した」というような表現があるかと思いますので、それでこの二つが並んでいるものが、ヨーロッパで始まった戦争が 12 月にアジア・太平洋に広がり、世界に広がったということで、恐らく、この見出しはこのままにしていただいても、戦線が広がるという様子が、あるいはそれが新しい戦争だというようなニュアンスでも結構だと思いますけども、パネルの中でそれを補足するような説明があれば、このまま小項目の見出しで結構かと思います。

委員

ありがとうございました。当初のここでの議論で、私の提案は、この本文の最後のところ「アジア・太平洋戦争が開戦し、日米が世界戦争へ参加することになったんだ」というような意味の文章を入れたほうが戦線の拡大という意味で新しい戦争になったんだということがわかるという、そういうご提案を申し上げたんだけど、先生が最後におっしゃったことと同じだと思いますので、じゃあ表題の維持ということで進めてよろしいでしょうか。

委員

了解でございます。オンラインの接続が弱い中、お聞き苦しいところもあったかと思うんですけど、そのような形でお進めいただければと思います。よろしくお願いします。

副会長

ありがとうございました。今までのご意見を伺っておりますと、個別の解説の文章の是非といいますか、内容チェックと、それから大きな見方で委員が各コーナーごとに設ける問題提起といいますかメッセージのような、ここで学ぶべきものは、どのような視点で学んでほしいですよというような、次の学び

につながるような問いかけが必要であろうということと、委員のご提案は時系列でやるには無理のある部分については大きな問いかけというか、これなんというかわからないですけど、修正を事務局でもう一度ご検討いただいて、このあとは、それを我々がもう一回見るということなんですかね。この次のステップは。

事務局

はい。今後のスケジュールですけれども。まず、来週 30 日に核兵器と放射線の部分を予定しておりますので、そこまでに整理が間に合えばご報告をさせていただきたいと思います。間に合わなければ、個別にちょっと、メール等でやり取りをさせていただいて、11 月の中旬に開催を予定しております運営審議会の全体会の前までに整理をしたいというふうに考えております。

副会長

ありがとうございます。そういうステップでよろしいですか。そうすると、次の運営審議会でのフィードバックをもう 1 回受けて、小委員会がもう 1 回開催されるということですか。

事務局

必要であれば第 3 回目という可能性もあるんですけれども、今のところ来週 30 日の会議に間にあうように調整をしていきたいと考えています。

副会長

はい、わかりました。

残り 30 分ぐらいですけれども、何かあればお願いします。

委員

進め方についての質問をちょっと重ねてさせていただきたいんですけれども、今日あまりいまのところ、まだそこまで議論はいってないのですが、その関連資料の選定は、むしろ A コーナー・B コーナーに比べて難しい部分があるというのは、やはりモノで語ることが難しい部分があると学芸員の方々がおっしゃられていて、私も本当にその通りだなと思うんです。そうしたことも含めて、今日は流れというかストーリーというものの確定を大局的にしていったなかで、一番来た来館者、特に若い人たちは、やはり見たもののインパクトというか、そこから受ける印象というのはものすごくそのコーナーそのものを左右するものだと思っております。という意味で、これから先どのような形で関連資料の選定と、そこにどういった説明文を書いていくのか、といったところでまた小項目そのものとの関連もいろいろ出てきますので、どのように進めるのか。今日はもう、どこになにを入れていけばいいかという議論はそこまで深められないと思いますので、そのあたりについての進め方のことを教えていただければと思います。

副会長

関連資料案は今いくつかありますけれども、具体的にどんな進め方になるのか、事務局お願いします。

事務局

今回で大きな流れがだいたい出来上がったと思いますので、それをもとに小項目の文章を短くするとしたら、ここで関連資料も出てくると思うので、今後そういう検討をしていくとともに、また、「戦時下の長崎」とか中央の核兵器の模型とか、ほかにも検討すべきところがあると思いますので、そこら辺はいったん考えて、もしかしたら小委員会のような形でご意見をいただくという可能性も今後出てくるかなと思います。いったんちょっと関連資料の検討は、こちらで考えて、ご相談という形になるかと思いますので、すみません、よろしくお願いいたします。

副会長

具体的に歴史的な資料はあるもの、探せばあるかもしれませんけど、既存のものであるので、それを我々のほうに提示されるんですか。

事務局

いま学芸員のほうでいろいろどういった資料があるのか精査している段階でございます。それが著作権的にクリアできるものかというのもこれからの段階ですので、どういった形でお示しできるかというのはちょっと今後検討しますけれども、こういった文字だけになるのか、実際に映像をお見せできるのかというのは、今後進める中でご報告していきたいという風に思います。

副会長

いろいろな条件や制約があるなかで、我々の希望としてはやはりこういう公開している小委員会ですので、こういうような画像を使いたいんだくらいの情報提供があったほうがいいと私は思います。よろしいですか。

委員

先ほどの委員の提案と私の提案を取り込みながら、最小限の修正でどういう風にできるかなとちょっと考えたんですけど。思ったのは、小項目の前のタイトルを問いかけにして、例えば 3-1 と 3-2 を合体させたらちょっとあれですけども。例えば、原爆投下に至る前の世界戦争はどのような経緯をたどったのだろうかみたいな問いにして、3-1-4 は最後の原爆投下は正当化されるのかという問いにしてそこに持っていく、統合してしまう。そうすると、短くなるので 3-1 と 3-2 が統合できるかもしれません。
また、「日本はどのような役割を果たしたのか」というタイトルを作って、そのなかの、3-2-3 あたりを抜き出して、日本が何をしたのかということがわかるようにして、原爆投下に至る、核時代の幕開け、どのようにして原爆投下がなされてきたのかという項目にしてその後にそれがじゃあ正当化されるのかという 4 つくらいの問いかけにして、ちょっと中身を少しずつ入れ替えることで、できるんじゃないかなと思ったんですけど。そうすると、大幅な変更はなく、基本的には時系列なんだけれども、問いかけに合わせた内容にしていくとすると、小中学生によりわかりやすいというか、何を学んでいるかわかりやすくなるのかなと思いました。

副会長

よろしいでしょうか。個々の解説文章について、もし何かご意見があれば事務局のほうにお寄せいただきたいと思います。あと 20 分です。1 人数分喋っていただいて、言い残しのないようにお話いただければと思います。

委員

またすみません。質問ばかりしてしまうのですが。次回の話に入っていないので、この「特集展示」のですね、「戦時下の長崎」に関してどうするかというのは、小委員会の議論の対象には入らないということでしょうか。

副会長

事務局お願いします。

事務局

はい。「戦時下の長崎」については小委員会の対象とはしておりませんので、ただやり方としては一緒なので、学芸員を中心に記載の内容といいますかパネルの案を作って、どこかの時点でご提示するよう

な形になるかと思います。

副会長

よろしいですか。

委員

はい。

委員

1点だけ、まだちょっと気になっていることなんですけども。南京の問題、3ページ、3-2-2「日中戦争の拡大と長期化」のところで、「南京事件」という用語になっている。前回の「南京大虐殺」から変わるわけですよね。この「事件」っていうのは、こういう戦争下における、形態としては虐殺、非人道的虐殺事件ということもできますけども、そこら辺をもう少し煮詰めて、「民間人や捕虜を虐殺する南京事件」とか「民間人や捕虜を殺害する南京虐殺事件」とかですね、そういう風に、「虐殺」の文字を残す余地も残っているのではないかと思うんですけども。この「事件」ということについて、歴史学者の方は戦時下のこういう民間人の虐殺とか、よく起こりますよね。ベトナム戦争のソンミ村の事件とか、今度のロシアのウクライナ侵攻の直後にも起こりましたよね。いわゆる民間の人たちへの虐殺が、そういうものの表現の仕方として、歴史学者はこの事件というのをどのように扱われるのかお伺いしておきたい。前の議論の時にお答えになっていたかと思いますけど、もう一回、すみません。大事なところなんで。

委員

はい、おっしゃるように例えばこの3ページのところの3-2の「南京事件」「南京虐殺」という表現をする場合、そういう展示もあるということは事実です。ただ、歴史用語としてというお尋ねでしたらまずそっちの方から答えると、歴史事典には角川の日本史小辞典や国史大辞典などもそうだと思いますけど、「南京事件」として載っていて、南京ではもう一個、これより前に国民党による衝突事件がありまして、それで1と2と2つ説明しているという、そういう辞典が代表的な辞典であります。それと、今の高校日本史の教科書などでは、「南京事件」という書き方をしているのが全てだと思いますので、そのことも含めて私はこの表現でもいいかなというふうに思っております。

例えば1932年だったかな、撫順炭鉱が抗日パルチザンで襲われて、平頂山という部落で虐殺事件、300人から4,000人ぐらい、数については明確にはなっていませんけれども、そこには資料館があって、遺骨をそのまま展示するような資料館になっていますけれども、これについても、歴史辞典では、「平頂山事件」と書いてあります。もちろん中国の資料館の展示は、「屠殺」という虐殺という意味の言葉で書かれていますけれども、そういう意味で、私はこの表現で、それらを参照すると、使っていいかなと思いました。

委員

ありがとうございます。私も今の委員の意見に賛成でございます。あの、「南京事件」について、いろいろな論争があり、呼称も含めていろいろな見方があると思うのですが、例えば岩波新書の笠原十九司先生と中公新書の秦郁彦先生、お二人はかなりイデオロギー、立場的に異なるんですが、どちらも「南京事件」というタイトルで本を書いてらっしゃる。委員のお話にもありました通り、基本的には歴史用語というのは比較的共有された言葉、例えば「満州事変」についても、英語ではですね、私が、英語でいろいろなイギリスなどで本を読むときには「Manchurian War」、戦争という言葉を使うんですね。つまりあれがもはや「事変」ではなくて、大規模な空爆を伴う戦争であると。しかし我々は、「満州戦争」という言

葉を使うのではなく「満州事変」という言葉を使っている。それは歴史用語として当時使われていたこと、その後に比較的広く共有されていると。そう考えますと「南京事件」という言葉が比較的中立的に専門家の間で共有された歴史用語、あるいは当時使われていた歴史用語として利用可能なのに対して、これを「南京虐殺」や「南京大虐殺」という言葉を使うと、おそらく特定の思想や立場に立脚しているというような、一定程度のイデオロギー性であるとか、あるいは立場の表明になってしまう。なので、例えば「明治維新」を「明治革命」と呼ばずに、「満州事変」を「満州戦争」と呼ばずに使うのは何か特定のイデオロギーが反映されたものではなくて、歴史用語として幅広く共有されているということが一つの基準というふうにも考えられますので、いろいろな議論、立場があり、また可能だと思いますけれども、私は先ほどのご意見の通り、現時点での「南京事件」が、もちろんいろいろな批判や指摘があろうかと思いますけれども、現時点で用いる用語としてはおそらく最もバランスが取れた表現ではないかと思っております。

委員

よくわかりました。それでは最後にちょっと微妙なことをお伺いしますけど、この資料館には最近は中国の方もたくさん来られるんですよね。その方々が読んだ場合に、我々が今日本の大体のコンセンサス的な用語として「南京事件」を使っているわけですけども、これに対してどういう理解を示されるか、そこにちょっとした危惧を感じますので、中国でも「南京事件」というような捉え方で書いた学術書や歴史書はあるんでしょうか。

委員

わかりませんけども、もしかしたら「南京事件」という表現はなくて「南京虐殺」「南京大虐殺」という表現しかないかもしれません。ただ、問題なのは今の 3 ページの表現にありますように、「南京事件」のそのものの意味を、「多数の民間人や捕虜を殺害する」と書かれていますが、「殺害」と「虐殺」の違いは、イデオロギーというよりも感情が入っているかどうかというその問題だと思いますので、捕虜や民間人を殺害すること自身は別の言葉で表現すればそれは「虐殺」というふうにも捉えることはできる言葉だけれども、そこは今、委員がおっしゃったような表現としては中間的な、そういう意味の殺害という、捕虜や民間人を殺害するということ自体は不法行為であるということは読み取ることは可能なので、そこで感情的な反応を示すような言葉を使うよりも、こういう言葉で中身を理解していただくということのほうがいいのではないかというふうに思います。

委員

基本的には私も賛同でございます。外国からどう見えるかというのは、もちろん例えば中国の問題だけではなくて、原爆投下についてはアメリカでの説明とも当然違うわけでございますが、翻訳というのは、日中歴史共同研究や安倍談話もみんなそうだと思うんですけど、翻訳というのは単にその国の言葉に訳すだけではなくて、その言葉がそれぞれの国で異なる意味で用いられているということで、そういった意味で、今ご指摘がありました点については、パネルの説明が例えば英語と中国語を併記するときにどういう表現で説明をするかという問題にもつながっていくのだろうと思います。従って日本語での表現については比較的日本の中で広く共有されたバランスが取れた表現を用いることはできると思いますが、これをそのまま英語や中国語に訳してもなかなかうまく伝わらないときに、恐らく英語や中国、例えばこれを「Nanjing Incident」とするのか、あるいは「Massacre」とするのか、これまた違った英語、中国語の問題が出てくると思いますので、この言葉を英語や中国語をもしも併記で入れるときには、同様の

意味で、かなり緊張感を持ってどういう言葉が最もふさわしいのか別途また検討する必要があるのかなというふうには考えております。

副会長

ありがとうございます。英訳は基本的に入れるんですよね。中国語はどうでしょう。

事務局

現在、小項目につきましては日本語と英語の 2 カ国語の表記で、今考えております。

委員

日中歴史共同研究でも「南京事件」という言葉が使われているんですか。

委員

はい、そうです。

副会長

残り 10 分になります。来週もありますので、最後にそれぞれ一言ずつコメントをいただきたいと思います。

委員

そうですね。基本的には非常によくできている内容ですし、全体としてもバランスが取れている内容だと思いますし、今後ともこういう形でやっていければと思いますけれども、もう少しダイナミックにわかるような形にできればなというふうに思っていますので、来週の核の脅威のところも同じような形でできないかなと思います。

委員

私たちの、というかこの展示の意義は、やはり、委員もおっしゃったように「どう核兵器をなくしていくのか」「核を使った戦争そして戦争そのものをなくしていくのか」ということであり、そういう大きな枠の中で何が材料として提示できるのかという意味で歴史に向き合うということであって。そういう意味では、私たちは加害の歴史も被害の歴史も両方とも知っていて、その上で世界に核兵器をなくすべきだ、戦争をなくすべきだということを訴えるという、そういう表現になるわけで、だから南京事件を幻だというふうにはやっぱり思えませんし、その表現をなくしたほうが原爆に対する理解が深まるとも思いませんし、そして先ほど委員がおっしゃった、原爆開発というのは日本もやっていたというのは、今さっきの表現のところで言うと、もともと核融合はドイツで発見されて、それにアメリカが気づいてやったという、ドイツも途中までは開発を考えていた。着手はしなかったはずで、そのことも含めて、日本もドイツもそういうことに気が付いていたけれども、アメリカが成功したという、そういう歴史というのも、世界の核というものを使うというひとたちの歴史の中にあるから、南京事件と同じように、私たちは歴史的な重要なことについてはすべて知っているし、それは提示するけれども、それでも核兵器というのは絶対許せないという、そういう展示になるように、次回も議論を続けていきたいと思います。

委員

やはり、先ほど申し上げた通り、大変論争的な時期でございますので、どのような書きぶり、記述内容にしても当然ながらいろいろな批判があるのだろうと思います。10 年前 20 年前に比べても、私の感覚として、かなり分断が進んでいって、より歴史認識の共有が難しくなっている気がしますので、そういった歴史の背景についてのパネルの記述、書かないという選択肢も、もちろんあります。しかしながら、こちらの資料館に、いろいろな人たちに背景を知っていただこうというと、可能な限り歴史学の研究成果を

土台にしたバランスが取れたものを提供するという趣旨では、私は、とてもいろいろと熟慮の結果、バランスのとれたものになっていると思います。そういった意味では来館された方々に背景を知っていただくという点では、十分な説明ではないかと思います。細かいところ、またいろいろと指摘、修正が出るかもしれませんが、大きな流れとしてはこの方向で進んでいければというふうに思っております。ありがとうございます。

副会長

どうもありがとうございました。

以上で本日予定されていた議題は終了いたしましたので事務局のほうにお返しいたします。

事務局

本日は長時間にわたり貴重なご意見をいただきありがとうございました。本日いただきましたご意見につきましては、事務局で整理した上で、次回の全体会である運営審議会に報告させていただきます。次回の小委員会は 10 月 30 日 16 時から開催いたします。テーマとしましては、B コーナー「放射線による被害」と C コーナー「核兵器の脅威」についてご意見をいただきたいと考えております。

以上で第 1 回小委員会を終了いたします。皆様ありがとうございました。